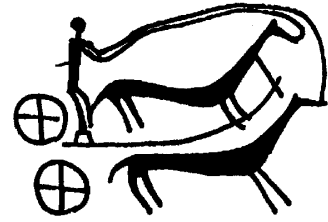


センターニュース

Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター

Newsletter No.27



全学教育委員会開催される	4
全学教育科目の見直しについて	5
全学教育の科目責任者からのひとこと	8
北大の教育の未来を考える忙しいが、楽しい会：FD	10
客員研究員にワシレフスキー氏着任	15
北海道大学放送講座好評裡に終了	16

巻頭言

FOREWORD

再び「単位」の意味について

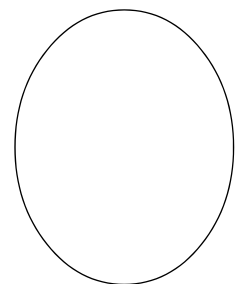
高等教育機能開発総合センター教授 小笠原 正明

昨年のセンターニュースで、単位をめぐる論争があったことを記憶している方も多いと思います。1998年6月発行の本誌18号に、電子科学研究所の下澤楯夫教授による「聞いただけで分かる講義をして良いのか?」という題の投稿原稿が載っています。その中で同教授は、北大の講義は聴いただけで分かることを想定してはいない、講義時間の数倍の時間と労力をかけてはじめて理解できる程度の講義が大学の講義の基準である、と述べています。これに対して次の号で、北海道教育大学の宇田川拓雄教授は、「学生の教室外の自習」に教員が付き合うとすると、週5コマの授業を担当した場合、残業やホームワークをしないかぎり研究時間はほとんどなくなるはずだと指摘しています。この論争は、一見、教育上の

建て前をめぐる議論のように見えますが、実は新制大学の教育課程の枠組みに密接に関係した本質的な問題を含んでいます。

1 単位は45時間

下澤教授の意見は、1947年に制定された大学基準の中の「講義に対しては1時間の講義に対し教室外における2時間の準備又は学習を必要とすることを考慮し毎週1時間15週の講義を1単位とする」という条項によっています。この最初の大学基準は、歴史的には、占領軍総司令部の民間情報教育局(CIE)が、新設の大学基準協会を通じて導入し



たものであることが今では明らかにされています(大崎仁「大学改革1945-1999」)。大事なことは、このような単位の計算方法とともに、学士号取得のためには4年間で最低120単位を取得しなければならないという基準が定められたことです。なぜ120単位でなければならないか明かではありませんが、当時のアメリカ人の常識として1週間の「労働時間」は45時間程度だから、半期15週で15単位、1年間で30単位という計算があったと言われていました。いち早く高等教育の大衆化を経験して、いろいろな試行錯誤を繰り返していたアメリカならではの制度といえましょう。

しかし、このような教育課程の数量化は、戦前の帝国大学の伝統を持つ日本の大学においてはほとんど無視されました。ヨーロッパのフンボルト型の大学の系統を引くこれらの大学では、「勉学に使用可能な時間」の計算などとは無関係な、ある絶対的な基準で学生の到達目標を考えていました。理学部の物理学科の教授であった中谷宇吉郎の門下生の回想によると、中谷先生の試験は、朝から始まって1日ばかりで行われたそうです。その間、試験監督などはおらず、学生は途中で勝手に昼食にでかけたりしながら、それぞれ自分のやり方で問題を解いたといえます。このようなスタイルの教育が可能だったのは、当時の大学生が社会的にも文化的にもエリート集団にほかならなかったからであり、そのエリートたちが、「ガウンとタウン」という言葉に象徴されるように、タウンとは画然と区別されていたガウンの世界、すなわち「学問の府」の中で訓練されていたからです。当時、教師も学生もきわめて個性的であり得たのは、それなりの背景があったからだと思います。

戦後も、エリート型の教育スタイルが曲がりなりにも可能であった時代がしばらくありました。そのような条件が保たれている限り、それぞれの授業のために何時間を費やすべきか、などということが問題となるはずはありません。

深刻な「単位の早取り」問題

しかし、戦後数十年を経て、本当の意味でのエリート学生は姿を消し、ガウンはタウンに占領されて絶滅の危機に瀕しています。1991年の設置基準の大綱化は、大衆化社会に適応した高等教育システムを本格的に定着させようとしたものです。その時に、理工系では160単位、最高では180単位近くにも達していた4年間の履修単位数が、一律に124単位に引き下げられました。しかし、この引き下げは、単位制度の持つ意味を十分に検討しないままに行われたきらいがあります。その結果、かなりの混乱が教育現場、特に全学教育などで起こりつつあります。

その1つは、「単位の早取り」という現象です。半年間の履修単位数を15単位とすると、1コマを1単位と計算する語学や実験を考慮しても週10コマ程度ですので、これを5日間で履修するとすると1日平均では2コマくらいにしかありません。授業時間だけで単位計算をする高校までのやり方に馴染んだ学生たちには、このように穴だらけの時間割は非効率的に映ります。そこで新入生たちは、1年の前期では朝から晩まで授業を受けようとしています。ちなみに、入ったばかりの学生に聞くと異口同音に「忙しい」と言い、授業において多少の宿題を課そうとすると、「他の授業もあるのでとても出来ない」と平気で言います。1日5コマ開講されている授業のうち余裕をみて4コマとって、すべての試験に合格したとすると、前期のみで30単位以上、すなわち卒業に必要な単位数の実に4分の1以上をとることができます。同じことが専門の課程でも可能だとすると、124単位は2年間で楽々といえる計算になります。もちろん、延べ4カ月にもおよぶ夏冬の休みや年度末の休みは、しっかりとることを前提にしています。このような計算から、多くの若者は、大学はひまで、アルバイトに相当な時間をあてながら楽に卒業できるはずだと思い込むようになります。

嫌われる少人数教育

このような「常識」が、大学生のみならずその予備軍である高校生の間にも広く行き渡ってくると、次の問題が生じてきます。受講生の一人一人が識別

され、準備に時間をかけざるを得ない小人数の授業を迷惑だと考える学生が現れてくることです。実際、選択幅の広い自由なカリキュラムにおいては、彼らの常識からはずれるこの種の授業は敬遠される傾向が顕著に現れています。大学らしい少人数教育に情熱を燃やす教官は、このようにして教育現場において学生の意識とすれ違い、傷を負うこととなります。

このような困った事態を改善する1つの方法は、各学期において履修可能な単位数に上限を設けることですが、それだけでは問題は解決しません。「タウン」においては時間はお金と等価ですから、空いた時間はアルバイトに回される可能性が大きいのです。しかし、だからといって、授業の外で教官が学生を監視して勉強させるやり方は、宇田川教授が指摘するように現実的ではありませんし、また望ましくもありません。

外国、特にアメリカの大学を訪問してまず目につくのは、図書館で、カフェテリアで、芝生の上で、階段の途中で、廊下の隅で、要するにキャンパスのいたるところで、懸命に勉強している学生の姿です。なぜそうなるかは、実際にクラスを覗いてみればすぐ分かります。ほとんどの授業がいわゆるインタラクティブな教授法を採用していて、準備をして行かない学生はそれに参加できないからです。(ただし、日本人留学生だけは、たとえ準備が十分であっても参加しない傾向があるそうです)。学生のこのような姿勢の違いを反映してか、日本の大学生のインテ

リジェンスは、残念ながら国際的にはなはだ見劣りがします。しかもその差は、どんどん広がりつつあるように思われます。私たちはいま、学生が勉強せざるを得ない授業とはどのようなものかを本気になって考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

シラバスの整備と授業法の改善を

上の課題に対する答は簡単ではありませんが、とりあえずシラバスにおいて、(1) 授業の目標を具体的に明示し、(2) その目標に到達するための方法を説明し、(3) 到達度を評価する方法を具体的に示すことは可能はずです。その上で、その日の授業のために、どの本のどの部分を読んでこななければならないか、どのようなレポートを書かなければならないか、何について発言しなければならないかをあらかじめ学生に明確に伝えた上で、それをチェックする方法を考えなければなりません。このようなことを、授業を担当するすべての教官が(それぞれのやり方で)実行しなければ効果がないという点が根本的に重要です。マスとしての現代学生は袋の中の水のようなもので、袋全体がいくら立派にできていても、部分的にでも弱い所があればそこから流れ出てしまうからです。

北大がFDなどを通じて、全学をあげて組織的に教育技術の向上をはかろうとしているのは、以上のような理由によるものです。

全学教育 GENERAL EDUCATION

全学教育委員会開催される

11月25日に第28回(平成11年度第5回)全学教育委員会が開催され、つぎのような議題について話し合われました。

- 議題 1. 全学教育科目の見直し(コアカリキュラムの導入)について
- 議題 2. センター庁舎 E 棟 2, 3 階および N 棟 実験室改修工事に伴う対応について
 - 1) 行事予定表(補講日)の一部変更について
 - 2) 定期試験の実施方法について
- 議題 3. 日本語・日本文化研修コース研修生の全学教育科目履修について

議題 1 では委員長から、コアカリキュラム導入に伴う全学教育科目の見直しについて、全学教育委員会小委員会において検討しているが、このたび科目および科目毎のねらいについてまとめられた旨の報告がありました。山口小委員会委員長より配付資料に基づいた説明につづいて種々審議ののち原案が了承され教務委員会に諮られることとなりました。コアカリキュラムについては今後、各学部を検討をお願いすることとなりますので、見直しの趣旨および科目などを 5 ページに抜粋して紹介します。

議題 2 では委員長から、センター庁舎 E 棟 2, 3 階および N 棟実験室の改修工事が平成11年11月から12年3月にかけて急遽おこなわれることとなった状況および工事の概要の説明があり、工事にともない講義室が不足しているために、いくつかの学部の講義室を借用のうえ全学教育の授業を実施していること、今後も協力をお願いしたい旨の依頼がありました。続いて改修工事に伴って生ずる新年度の基礎実験への影響を最小限に抑えるために、基礎実験を第 2 学期の補講期間に実施することにし、補講日を1日増や

すことが諮られました承されました。従って補講日は平成12年1月11日～14日の期間で、4・5 講時は基礎実験の補講となります。

議題 3 では、留学生センター長から、日本語・日本文化研修コース研修生に対し、全学教育科目の履修を認めることとし、北海道大学留学生センター日本語・日本文化研修コース教育課程内規に盛り込むことを了承して欲しいという依頼がありました。この取り扱いについて小委員会において検討したことが委員長から説明されたのち、山口小委員会委員長からの説明につづいて審議に移り、上記研修生に全学教育科目の履修も認めることが了承されました。

報告事項 1 では、委員長から、9月20日の委員会で検討した定期試験における不正行為について、工学部での処分結果の報告がありました。身代わり受験については工学部の前例に照らして無期停学処分が妥当との結論に達したとのことで、当委員会の提案との食い違いが生じました。今後、全学教育科目の試験中における不正行為に対する処分決定までの審議手順を見直す必要があるかと思われるので、その検討を小委員会に依頼することになりました。

12月9日に第29回(平成11年度第6回)全学教育委員会が開催され、つぎのような議題について話し合われました。

- 議題 1. 平成12年度全学教育科目の開講予定について
- 議題 2. 平成12年度全学教育部行事予定表について
- 議題 3. 平成12年度全学教育科目の TA について
- 議題 4. 平成12年度全学教育科目に係わる既修得単位の認定について
- 議題 5. 平成12年度新入生オリエンテーションの

実施について

議題1について委員長より以下の説明があり、審議のうえ了承されました。

- ・来年度も第1学期には、総長、部局等の長による「北海道大学の人と学問」を、第2学期には本学の卒業生による「大学と社会」を開講する予定である。
- ・総合講義の開講数は3科目減の39科目である。一般教育演習は14科目増の141科目となっており、開講学期も第1学期6割、第2学期4割でバランスがとれている。
- ・一般教育演習は、総開講科目数の一割までは非常勤講師（OB教官）に担当していただくことを認めている。来年度は第1学期、第2学期ともに4名であり、これを認めることとしたい。
- ・リメディアル教育検討専門委員会から、一部の科目（生物・物理）について特設クラスを設けることが提案されており、これにより時間割りの一部に変更がでることも予想される。

また、山口小委員長より、一般教育演習の200名以上の多人数クラスについて、1クラス50名以下に制限することを、平成13年度の履修調整へむけての試

行として平成12年度4月より実施したいという説明があり、審議のうえ了承されました。

議題2について、N棟改修工事の竣工予定を考慮して、補講日を7月24日～8月4日とし、7月31日～8月4日は基礎実験のみの補講日とする説明が山口小委員長よりあり、審議の上了承されました。

議題3について、一般教育演習および論文指導講義のTAについて、担当教官より提出された理由書を小委員会において検討したことが小委員長より報告されました。平成12年度については、従来TAが認められていなかった多人数講義に試験的に1名のTAを認めたい旨の申し出があり、審議のうえ了承されました。

議題4について、委員長より既修得単位は各学部において認定することとなっているが、全学教育科目について単位認定の依頼があった場合の日程について諮られ了承されました。

議題5について、来年度の新入生オリエンテーションを平成12年4月6日（木）午前10時より行うことについて、その方針、実施へむけての日程について、委員長より諮られ了承されました。

全学教育科目の見直しについて [抜粋]

本学では平成7年度より学部一貫教育が始まり、各学部で独自に開講される専門科目以外の科目は、複数学部の学生を対象に、全学の教官の協力により、共通の教育内容をもって「全学教育科目」として開講されることになり、こうして全学教育がスタートした。開始以来6年目を迎える全学教育に対しては、これまでも「全学教育科目のレビュー」等によって検討や点検が続けられてきたが、新課程の下で学んだ卒業生を送りだした現在、その実施の経験を踏まえて見直すべき時期が到来していると思われる。

また、現在本学では、すべての学部において大学院重点化が進行しており、これによって専門教育の

重点が次第に大学院へと移行し、学部における教育は新しい「学士課程」として再構築を迫られている。

学部一貫教育体制においては、それぞれの学部が従来の一般教育科目をも含む首尾一貫した学部カリキュラムをそれぞれの責任においてデザインすることが原則である。しかし、「学部一貫教育」と「専門一貫教育」は必ずしも同一ではない。前者は、「専門の論理」で貫かれた体系的なカリキュラムと「純粋な教養教育」のいずれをも含む包括的な概念であるのに対して、後者はその専門部分のみを示すものである。したがって、学部一貫教育体制のもとでは、大学教育に必須の教養教育・基礎教育は、当該学部

が学生の入学時から卒業までのカリキュラムを設計する中で具体化されなければならない、これらを全学的に共通化した全学教育は、各学部の教育課程における必要最低限の共通科目群を形成することになる。

学士課程は便宜的に教養教育、基礎教育、専門教育の3つに分類される。基礎教育の多くは理系では学部一貫の体系的な専門教育のなかに取り込まれる。また学部レベルの専門教育は、理系・文系を問わずより基礎を重視した総合的なものになろう。専門の骨格を明らかにし、専門的な素養を身につけさせることがその主要な目的となる。これは「専門教育の教養化」に他ならない。医学部や歯学部など一部の学部を除く学部卒業生の進路の多様化を考えると、このような学士課程における専門教育の変化は自然な成り行きである。一方、純粋な教養教育は、リベラルアーツを中心とする必須の教養科目、すなわち、専門のコア(核)カリキュラムに対置される「コモン・コアカリキュラム」として、全学の協力のもとに実施される必要がある。これが新しい学士課程の中核をなすものである。

全学教育の中心をなすコアカリキュラムは、高等職業教育とはカテゴリーの異なる大学の普通教育、すなわち高等普通教育とみなされる。それは普通教育としての性格上、シンプルで分かりやすい構造をしていなければならないが、一方では高校までの中等普通教育とはその枠組みにおいて明確に区別されるものでもなければならない。また、その内容は普遍性の高いものであると同時に、現代社会の問題と何らかの形で結びつき、さらにそれぞれの学問分野の社会的・歴史的な位置づけや将来への展望までも考察するものであって欲しい。厳選された題材に基づいて、教師と学生、学生と学生が討論し、考察することがこの教育のエッセンスである。主として初年次の非専門の学生に対してこの様な授業を展開できるのは、それぞれの分野で最も優れた見識を持っている専門家のみである。その意味で、コモン・コアの教育は、「最良の専門家による最良の非専門教育」と言えよう。これは新制大学発足以来、北海道

大学の教養教育が掲げ続けてきた理想でもある。

コアカリキュラムは次世代のリベラルアーツ教育であり、それは、従来からの個別の学問分野に基礎を置くものと、複数の分野を融合・横断したものの2種類に分けられる。多くの講義を、現代に必須の教養科目および基礎科目としてグループ化し、それぞれに普遍性の高いメッセージを付与する。そのことによって、細分化した学問分野に一定の共通課題を与え、カリキュラムとしての整合性を図り、統一性を保たなければならない。

今回の見直しにおいては、以上のようなコアカリキュラムの考え方に基づいて、以下に示すように、本学の全学教育科目を、「教養科目」と「基礎科目」に二分し、教養科目をコモン・カリキュラムの中心科目として位置づけることにした。これは、大学審議会答申にあげられた「課題探求能力の育成」の基礎を与える科目、言い換えれば、自らの判断能力と意思疎通能力を高め、社会における自らの立場を把握する能力を高めるための科目群を本学において実現するものである。

教養科目の核となるのは「分野別科目」と「複合科目」である。分野別科目とは、単一分野からなる主題別科目であり、これまでと同様に主として責任部局からの提供を想定している。これに対して複合科目は、複数の分野を融合する科目であり、これまでの総合講義を基に、全部局の支援を得て作り上げるものとして位置づけられている。

これからの作業として各学部をお願いすることは、表1の科目構成に基づいて、各学部において全学教育科目の履修の指針となる「実行教育課程表」を改訂することである。

その際、各学部において検討いただきたいのは次の点である。

- (1) 教養科目の学士課程における位置づけ
- (2) 分野別科目、複合科目のバランスのよい履修をうながす単位設定
- (3) 教養科目の高学年履修のあり方

表1. コアカリキュラム導入による学部一貫教育科目区分

<p>1 教養科目</p> <p><分野別科目></p> <p>(1) 思索と言語</p> <p>(2) 歴史の視座</p> <p>(3) 芸術と文学</p> <p>(4) 社会の認識</p> <p>(5) 科学・技術の世界</p> <p><複合科目></p> <p>(1) 環境と人間</p> <p>(2) 健康と社会</p> <p>(3) 人間と文化</p> <p>(4) 特別講義</p> <p><一般教育演習></p> <p><外国語></p>	<p><共通科目></p> <p>(1) 体育学</p> <p>(2) 情報(情報処理Ⅰ, 情報処理Ⅱ, 情報科学)</p> <p>(3) 統計学</p> <p>(4) 図形科学概論</p> <p>(5) 心理学実験</p> <p>(6) 基礎科学実験(文系)</p> <p>(7) 論文指導</p> <p>2 基礎科目</p> <p><自然科学基礎科目></p> <p>(1) 物理学(物理学Ⅰ, 物理学Ⅱ, 物理学Ⅲ)</p> <p>(2) 化学(化学Ⅰ, 化学Ⅱ, 化学Ⅲ)</p> <p>(3) 生物学(生物学Ⅰ, 生物学Ⅱ, 生物学Ⅲ)</p> <p>(4) 地学(地学Ⅰ, 地学Ⅱ, 基礎地球惑星科学)</p> <p>(5) 自然科学基礎実験(物理学, 化学, 生物学, 地学)</p> <p>(6) 数学(線形代数学Ⅰ, 線形代数学Ⅱ, 微分積分学Ⅰ, 微分積分学Ⅱ, 微分積分学Ⅲ, 数学概論A, 数学概論B)</p>
--	---

(4) 各履修期における履修科目の単位数の上限設定について

このうち(4)の項目は、学校教育法の改訂に伴って検討すべき事柄として浮上してきたものであるが、特に全学教育に関してご検討いただきたい。

また、これらの事項についての学部での検討を踏まえて、平成13年度から新しい全学教育科目を実施するにあたって、来年度から全学教育委員会で検討しなければならない事柄としては、教養科目の履修調整の問題がある。これは、上記の(2)、(4)にも密接に関わるが、現行のように、教養科目については、科目の時間割上の設定も実質的に調整が行われず、履修は学生の自由選択に委ね、履修科目の数の制限もないという状態は改める必要がある。各学部において実行教育課程が定まり、それぞれの科目の履修上の単位設定が行われた段階で、時間割上の設定も含めて、具体的に履修調整をどのように行うかを詰めなければならない。

この教養科目の履修調整を円滑に行い、各科目の

内容を充実させるためには、それぞれの科目に置かれる科目責任者の役割が重要となる。分野別科目にあっても、それぞれの科目に複数の責任部局から科目企画責任者を割り当て、科目のねらいと講義内容を検討し、時間割上の開講コマ数を調整する体制を確立しなければならない。また、複合科目については、全学部に担当科目を割り振り、その科目担当責任者を置き、全部局の支援によって、この科目の内容充実を図りたい。このように、全学教育科目にあつては、基礎科目をも含めて、科目責任者にはその分野の教育内容に関する議論を深め、学部を越えて講義を組織し、カリキュラムを実現してゆくことが求められる。もちろん、各部局においては、こうした科目責任者の任務を支える体制を整備する必要がある。

さらに、(4)に関連する学校教育法改訂の趣旨に沿って、こうして設計されたカリキュラムについて、厳密な成績評価基準を確立していくことも今後の全学教育に課せられた課題である。

*** 全学教育の科目責任者からのひとこと ***

4月より全学教育の各科目に科目責任者がおかれることになり、センターニュース25号に名簿を掲載しました。前号から科目責任者の方々がいま考えていることについて寄稿していただいています。今回はその2回目です。

基礎科目としての化学

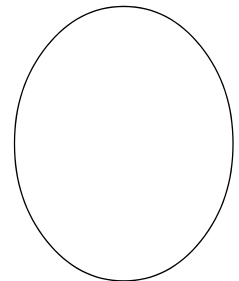
「化学」企画責任者 大学院理学研究科教授 稲辺 保

理学部が責任部局という関係から、4月から企画責任者として、「化学Ia, Ib」「化学II」「基礎実験(化学)」の企画・運営に係わっています。実際に担当されている先生方の多くは大学院地球環境科学研究科物質環境科学専攻に所属しておられ、また理学部だけではなく、工学部、農学部、薬学部、電子科学研究所、触媒化学研究センターからの協力を得て上記のカリキュラムは運営されています。

それぞれの学部・学科によって「化学」の位置付けは異なっており、一様な教育目標を掲げるのは難しいのですが、全学教育科目として専門科目への橋渡しをする役割があると考えています。最近は環境

問題等で化学物質が悪者にされる事が目立ってきていますが、化学を正しく理解する事がこれから益々重要になると考えられます。学生の意識にも自然破壊等に対する感心が高まってきており、将来自分のやりたい事を1年生に訊ね

ると、「排ガスを無害にする触媒」「無害なプラスチック」「癌を直す薬」等を開発したいという答えが返ってくる事が多く、その熱意を卒業後まで持続させるような学生生活を送って欲しいと思います。

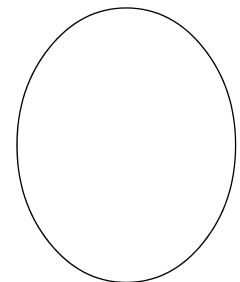


人文学 (the humanities) の可能性

「思想と心理」企画責任者 文学部哲学講座助教授 千葉 恵

学問のひとつの明確な目標は自己理解、人間理解、自然理解そして超自然理解、各領域のフィードバックを通じて、われわれが生きているこの現実世界の理解を深めることにある。一般論として、人文学と自然科学の区別が有意味であるとして、人文学の持つひとつの特徴は、人間の生(なま)の生に近いところで思索が行われ、自己や人間等の理解を深めることにある。人間をも自然物として観る自然理解における理解と人文学における理解の相違として、前

者は三人称的・客観的に蓄積可能であり、科学技術として公共の財産となり用いられるのに対し、後者の理解は端的に代替不能な個性の形成に用いられる。理解とは、各自が持つ言語網(それは多次元的であるが)が、あたかも脳内のシ



ナプスが繋がるように、有機的に諸キーワード（eg. 生の基本概念であるだけに多義的な幸福，愛，自由，正義，真，善，美）間に関連がつき，生きた一つの言語網として各次元において明確な形態を獲得することである。そして自己理解や人間理解には（もちろん自然理解も人間理解に影響を与えるが），自然科学が用いる言語における概念の一義性とは異なり，浅深があり，その理解の程度に応じて現用言語のネッ

トワークが形成される。所謂哲史文そして心理，言語，社会等の学習，理解を通じて，各自は自己理解の反映のもとに形成される自己が，そこにおいて自己自身との一致において満ち満ちて生きることが出来る独自の言語網を作る。それが個性であり，それはどこまでも深まりうる可能性を秘めたものである。これが人文学の無限の可能性である。

情報教育の将来

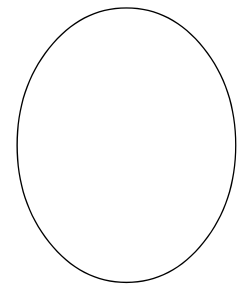
「情報科学・情報処理」企画責任者 大学院工学研究科教授 佐藤 義治

現在，「情報処理」は学部・系ごとに1年前期または後期に実施されております。これは計算機台数と実習スペースの不足が原因でしたが，幸いに，平成11年度末に情報メディア教育研究総合センターの教育用計算機システムがリプレースされ，総台数約1200台（現670台）の計算機が導入されることと，平成12年度から総合メディア交流棟に実習スペースが得られることから，全学部・系を対象に1年前期に「情報処理」が開講できることとなります。これに伴い「情報教育」全体の見直しを行い，平成13年度を目処にカリキュラムの再検討を行いました。検討の結果，当面（5年間位）は現状の「情報処理」，すなわち計算機の入門コースは残す必要があると判断されましたが，これだけで大学の「情報処理」教育とするには不十分であることは言うまでもありません。「情報処理」教育の主要な目標は計算機に対する正しい

認識をもたせることです。

そのためにはプログラミングの知識が不可欠であるとの観点から前期の入門教育に引き続き後期にプログラミングを含む高度利用技術の実習を企画いたしました。ここでいうプログラミングとは，実際にプログラムを書く能力を期待するものではありません。

最近，携帯電話の普及とその急速な進歩の様子を見ておきますと，ごく近い将来，計算機端末はほとんど携帯電話と区別がつかなくなり，われわれの考えている以上に早く，計算機の基本操作の教育などは不必要な時代がくるのではないかと思います。



前号の訂正

センターニュース26号7ページの中村郁先生のひとことのタイトルに校正ミスがありましたので，お詫びして訂正いたします。正しくは次の通りです：

「ピアス，それはそれでいいことだ……」

高等教育 HIGHER EDUCATION

北大の教育の未来を考える忙しいが、楽しい会：FD

高等教育機能開発総合センター高等教育開発研究部長，医学部教授 阿部 和厚

第2回北海道大学教育ワークショップが，平成11年11月26・27日，定山溪青らん荘において，6名のタスクフォースのもとに，北大の各部局の教官32名，東北大から2名，北見工大から3名，韓国から1名の合計44名で実施されました。朝早くの開会には，丹保総長もかけつけ，北大の教育展望について15分ほどのお話をいただき，研修は5グループに分かれてのブレインストーミング体験から開始されました。

このスタイルのFDは，北大では，私が中心となって平成4年に医学部で2泊3日で開催したのが最初です。北大としては，これまで私が8年間参加してきた点検評価委員会で，発足の平成4年からFDについて議論されていました。さらに「学生による授業評価」「それに対する教官のレスポンス調査」「学業成績評価に関する調査」「教官の教育業績評価の

検討」などからみても組織的FDが必要であることは明らかとなっていました。

一方，平成7年度に発足した高等教育開発研究部が中心となって，「新任教官研修会」，「TA研修会」「高等教育に関する国際ワークショップ」など，様々なFDを行ってきました。そして，上記の点検評価委員会による成果もふまえて，平成10年11月には総長裁量により，現任教官の教育研修として1泊2日の第1回北海道大学教育ワークショップ(FD)が開催されました。

FDには様々な形があります。私は，最近，他大学のFDに招かれる機会が多くなっています。ほとんどが講演型です。これに，1泊して学会の分科会のように討論中心のセッションを加えたものもあります。

北大のFDは、グループ学習の形式をとり、午前にはじまり、1泊して翌日の午後まで、数回のミニレクチャー、グループ作業、全体発表・討論を繰り返すものです。日頃、授業、教育の専門家として活躍しておられる先生方が、「教官個々が大学を支えることの位置づけ、教育の基本的構成要素、大学における各科目の存在意義、授業設計、成績評価法など」をあらためて整理することが目的です。今回は、北海道大学の将来、社会的役割についても展望することになりました。

講演型FDと参加型FDとでは、参加者の反応が全く異なります。大学の授業と同じです。知識伝授中心の講義よりは、学生が主体的役割を演じる学生参加型授業で学生が生き生きするのと同じです。FDは学生参加型の小グループ学習の体験としてもデザインされました。

第2回ということもあってか、本年度の参加者は昨年にもまして、スムーズにグループ作業の本流に乗って討論し、それぞれのプロダクトをつくりあげては、全体討論にのぞみました。限られた時間で成果をだすという緊張から効果的なまとめができます。そして、全体討論は、それぞれの思いを共通の理解に高めます。今回も、各グループのまとめた内容の

質の高さには驚かされました。多様な分野からの教官による共同作業が、質を高めたに違いありません。

忙しいなかでの息抜きも大事です。今回は、定山溪ということもあって、どこかの大浴場にでかける時間もとりました。また、夕食後の研修が終わってからのほろ酔い懇談会では「ディベート体験」をさかんに盛り上がりました。そして、2日目の午後には、北大のこれからの教育戦略として、「北大に芸術学部を」「北大北方圏東アジア基幹大学構想」「新連携大学院構想」「地域社会対応型大学」「北方圏フィールドサイエンス基地構想」「学内サバティカル構想」「学部横断教育交流」「ジェネラリスト養成大学院も重要」「社会人教育推進、大学開放」「北方圏留学生大量受け入れ」などのアイデアが出されました。

最後の感想では、総合大学として様々な分野の教官が一堂に会して教育を討論することの意義、さらに日常の授業で抱えている問題を討論できる場の必要性も述べられていました。主催者側としても大変手ごたえのある会でした。参加のみなさん、お疲れさま。楽しい会でした。これからの北大の教育をよろしく。

感想 二, 三

文学部教授 須藤 洋一

FDなるものに出た。1泊2日の、早い話が研修である。しごき棒でこずかれながら、一列に並んで絶叫する、腕立て伏せに駆け足で、体を鍛える、あるいは朝から晩まで講演、講義を聞いては一心にノートをとる。かなり古いイメージだが、そんな悪夢のような光景が頭に浮かぶ。ひたすらユウツである。

事實はどうであったか。

会場にはむろん、しごき棒はない。体力訓練も、ノート取りもないが、その代わりに、時間との競争がわれわれを待ち受けていた。与えられた課題に取り組み、成果を出す。グループに分かれ、グループのメンバーが共同で仕事をする。成果を発表し、たがいに批評する。こうした目標と方法に即して、すべての活動を一定の時間で 越えず、余さず 終わることが求められる。当たり前といえば当たり前

のはなしだが、長く考え、短く語るという人間には、容易ではない。

総じて、当世の流儀は標準化、均質化の方向に向かっていているらしい。研修話が持ち上がるというものその一つで、授業の内容や講義の案内にしても、一つのかたちに収斂させようという力が働いているようだ。それも程度の問題で、私は研修が必要だというなら、世の中にはいろんなやり方があるぞ、という方向で進めてもらいたい。ある日、目を醒ましたら、教師たちが一斉に制服を着、同じ表情で同じせりふを吐き、同じ冗談で笑わせ、同じ文句を板書している、というのはどんなものだろう。

収穫 飲み会。元気者(男女を問わず)。風変わりな男たち。寡黙。その他大勢。お助けマン。

教育ワークショップの感想

経済学部教授 佐々木 憲介

2日間の研修は意義のあるものだったと思う。もっとも、2日もつぶして参加したのだから、意義のあるものだったと思いたいという心理も多少働いているのかもしれない。私にとって研修が有意義だったのは、学部教育の標準化の必要性を改めて感じる機会となったからである。大学院重点化に伴って、学部の授業を基本的な科目にしぼり、複数の教官が交替でそれを担当するということが考えられるが、その場合には、授業内容や成績評価の基準を統一して

おかなければならない。各教官がそれぞれ個性的な授業を行うという従来のやり方は、許されなくなるであろう。研修の内容がそのまま経済学教育に適用できるわけではないが、標準化を考える上で必要になる項目について、手がかりを得ることができた。例えば、教育目標の設定、シラバスの作成、成績評価の方法などがそれである。これから、分野の特徴にしたがって、各項目の具体的内容を考えていかなければならないと思っている。

北海道大学教育ワークショップに参加して

医学部助教授 西村 正治

平成11年度北海道大学教育ワークショップは、11月26日～27日1泊2日の日程で、定山溪温泉青嵐荘を会場として開催されました。今年が第2回目であるというのに内容は分刻みで見事に企画されており、私は新鮮な充実感を抱いて、知りあったばかりの他学部の先生達と名残惜しく別れを告げたのでした。

「学部長に指名されて仕方なく参加しました」「このワークショップはある種の洗脳だという噂があります」「他に参加する人がいなかったので・・・」といった挨拶が定山溪に向かうバスの中での自己紹介には多くありました。「このワークショップに参加することを楽しみにしていました」と挨拶したのは私くらいだったかもしれません。しかし、私は教育者の子供に生まれ、多くの尊敬すべき諸先輩から受けた影響を通じて、教育こそが明日の優秀な人材を生み出す原点であるという信念を持っています。また、北海道大学の研究レベルをさらに上げるためには学生の時から高いレベルの教育を与え、またその環境をつくってあげることが我々教官に与えられた任務の一つであると信じています。このような信念は、私が10数年前にボストンに留学し、ハーバード大学医学部の学生を目の当たりにしたときの衝撃にも根差しています。学生の学ぶ姿勢があまりにも北大生とは違っていたのです。日本の学生が勉強しないのは受験勉強からの開放感によるものであるとか、卒業後に本当の学問やら職業的訓練があるからあわてる必要はないと釈明することは簡単です。しかし、最も知的に刺激されなければならない時期に旧態依然とした知識伝達型の講義を漫然と続けている我々にも責任の一端があるのではないかというのが、私が最近思い続けていたことでした。

ワークショップはほとんどミニレクチャーとグループ作業とで構成されています。「北大へのニーズと

課題」から始まって、「カリキュラムの科目：目標の設定」「目標のてなおしと方略」「授業設計てなおしと評価」と進み、最後に「北海道大学をどのような大学にするか」という提言をするところで終わります。お互いに専門の異なる先生方が共通のカリキュラムを作っていく過程は、実際にそのカリキュラムが役立つかどうかは別にしても、プロセス自体が体験学習としての意義を有しています。各グループは7、8人からなり、毎回、グループ内で、議論をリードする人、それを記載する人、発表の準備をする人、そして実際の発表者などの役割分担が決められます。発表と討論は本当に楽しいものでした。どの先生もプレゼンテーションはさすがに上手で随所にユーモアが溢れ、常に真剣な中にも笑いが絶えないといった感じで2日間を終えました。今ひとつ、物足りない感じがしたことは、学生のモチベーションをどのようにして高めるか、各部局別にどのようなカリキュラムや講義の工夫をしているか、大学における外国語教育とくに英語教育をどのようにレベルアップするか等についても話し合いたいと思っておりましたが、そこまでの時間は全くありませんでした。

初日午後8時半からのディベート体験「茶髪は是か非か」は、ビールを飲みながら余興として行ったものではありませんが、ねらいとしては学生教育にディベートを取り入れるための体験学習の意味があったのでしょうか。このようなディベート技術を教育の中に取り入れることに日本ではまだ反対の声があると聞きます。しかし、私は、科学論文を書く基礎もこのディベートにあるのではないかと考えています。自分の新しく発見した事実や新しく考え出したアイデアをどのように意義あるものであるかを読者にわかるように主張すること、また、仮説をたて、方法

を説明し、観察結果から結論に至るまでの論理が研ぎ澄まされたものでなければ論文としては成り立ちません。この論理を組み立てる際には、常にどのような反論がありうるか、あるいは、どのような弱点があるかを常に自問自答しなければなりません。この思考プロセスはまさにディベートそのものであるというのが私の考えです。日本人が一般に国際学会における存在感が薄いといわれるのも、語学力の差異ばかりでなく、このディベートの訓練ができていないことも一因ではないでしょうか。

今回のワークショップに参加して私が痛感したこ

とは、教育には技術があり、これまで多くの大学人はあまりにもそれを無視していたのではないかということです。よい研究者がよい教育者であるという保証はありません。しかし、よい教育は、よい研究者、よい社会人を生み出す原点です。我々は、それを再度認識し、教育は教官の重要な任務であり、その任務もまた研究業績と同じように評価されるべきものであるという認識を持つべきではないでしょうか？このような教育ワークショップに若い教官がどんどん参加されるよう願ってやみません。

茶髪ディベート考

大学院理学研究科教授 渡邊 暉夫

F Dの懇親会では「余興」として、ディベートを行なった。ディベートを学生の教育に取り入れるための教官による体験学習であるが、ディベートを教育に持ち込むことには賛否両論があるようだ。「アメリカではさかんだけどねえー、何も真似しなくても」、「真理を追及するというより、如何にアピールするかというテクニックが優先されてしまうので、教育効果に疑問がある」などの批判的見解も聞く。しかし、自分の意見とは離れて、討論題目に対する立場を決められて論を立てるのは、それなりの論理の訓練にはなる。特に、教えられたことを記憶することだけを「強要」されるような受験体制のなかでは、学生は新鮮味をもって、ディベート学習を受け入れるかもしれない。一体、ディベートとは何なのだろう、自らの経験を通して、考えて見た。

ディベートのテーマは茶髪(チャパツ)は是か否か、であった。今回のDebateと称するゲームは「茶髪は是である」というチームが圧勝した(572対446)。

茶髪は本人の選択の自由として認められて当然である、大学に入ってこれまでの規制を破りたいとい

う若者の心理は肯定されるべきであるという肯定派の出張は、今や学内では茶髪を見ることが多いという現実の前に大変説得力をもっていた。否定派に振り分けられた人もこの現実を否定する気はなかったのだろうか、最終弁論には力が入ってはいなかった。

私は肯定派に入っていたので、否定派が弁論に困ってしまうのが面白く、久振りに痛快な思いがした。しかし、同時に大差がつきすぎて、何故、否定派が大敗したのかが気にかかった。判官びいきで否定派の勝つ道を考えてみた。

「否定派は臨床実習のような場合を想定して議論を進めるべきであった」とはジャッジからのコメントであった。否定派がケースを特定し、肯定派の一般解をかわして議論してしまうのは反対尋問を面白くさせたであろう。肯定派はいわば大学人の常識に乗って筋道を立てていたわけだから、「そのレベルでの是か否かではディベートが成立しない。ディベートをする以上、状態を特定すべきである」と論を立てれば、状態設定の是非でも活発な議論があったであろう。否定派としては「葬儀に茶髪は是か否か」

などという議論に持ち込む手もあったであろう。

状態を特定しないで否定派が勝つ手はなかったか？
2つの立論を用意したい。

1) 茶髪は人に「不快感」を与えることがある。それは単なる慣れの問題だけではない。何故、「不快」なのか？ 一つは茶髪をした若者が自信をもって堂々としていない場合である。もう一つ、人工の茶髪は美しくないのである。髪に生気がないのである。自然の髪のもつ「つややかな美しさ」は完全に失われている。「陽に輝く金髪の美しさ」にはほど遠い茶髪を美しいと思っているようでは、鋭い美意識を養うことはできない。自然の金髪と茶髪をならべてみれば、茶髪の滑稽さは一目瞭然である。茶髪は本物を知らない若者の悲しい自己主張としてのみ認めてもよいが、情けなくはないか！ 茶髪などは、白髪を隠したがったり、髪の毛が少なくなったのを気にする年寄りのやることである。

2) 既成の体制や抑圧に対する若者の抵抗の姿勢として、評価出来るか？ 「NON」である。そんな下らんことで抵抗になるのか？ なるとしたら、所詮はちっぽけな自己満足にすぎない。自らを抑圧しているシステムについてもっと深く考えるべきではないか？ 茶髪にしてそれまでの抑圧からの解放感

にひたったところで、茶髪は「不良学生」と言って禁止する学校教育、つまり今や校則だけで生徒は窒息状態になっている教育（ここは議論の都合上少し断定したほうがよい）を変えることになるのか？

若者を抑圧している体制に対して。真の意味の抵抗と抑圧システムの廃止を目指さなくて、なんの生きがいか。茶髪を容認していることは、若者の不満を一時的な自己満足にそらしているだけで、若者のエネルギーを社会を前向きに回転させる力へと変える道をつぶしている。このような無駄を大学が許すべきではない。

茶髪をしている学生と向きあって、「くだらんことをやめろ」と言ってはじめて、大学の教育ができるのではないか。茶髪を肯定しているのは、物わがりの良い教官であるふりをした教育の放棄である。

これで、肯定派の一般論を突破できないだろうか？

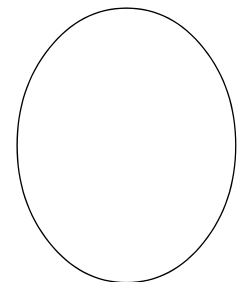
もっとも、「茶髪にとどまらず、もっと大胆な服装をして、徹底して現実社会を否定し、クリエイティブにパイオニアワークに邁進する糸口とせよ。そうであってこそ、北大らしい人材が育つ」という肯定派の反論もあろう。

ということで、すっかりこのゲームにはまってしまいました。ディベートって意外と面白い。

客員研究員にワシレフスキー氏着任

本年度の客員研究員として、ロシアのサハリン州立大学からアレクサンダー・ワシレフスキー (Alexander, Vasilevski) 博士が着任しました。ワシレフスキー氏は1957年サハリン生まれ。ユジノサハリンスク教育大学卒業後、ロシア科学アカデミーの歴史学研究所の大学院を修了し、現在はサハリン州立大学歴史学部長の要職にあります。専門は考古学、歴史学および科学と教育のマネジメントです。北大には2月4日まで滞在し、日露間の教官と学生の

コラボレーションについて研究するとともに、ロシアの高等教育の現状について講演します。12月9日には以下の講演をしました。今回の講演は1月20日に本研究部で開催が予定されています。演題は"Study of local history in Sakhalin region"です。



< 極東ロシアにおける最近の高等教育システムとその内容 >

Current Situation in the System of Higher Education in the Far East of Russia

極東ロシアは8地域で構成され、622万km² (米国の2/3)の領域に100の民族、746万人の人口(ロシア全体は1億4700万人)を擁しています。この中で州立大学(国立大学と同義)は54校(ロシア全体では1065校)、私立大学は8校あります。サハリンには州立大学が3校、私立大学が2校あります。学生の人口に占める比率は1万人について155人ですが、ロシア全体では178人です。ロシアの大学は、University, Academy, Instituteの3種類に分類されます。Universityは総合大学と特殊大学(医学、工学、教育等)に分かれます。サハリンには極東州立大学(学生数7500名)、サハリン州立大学(学生数4500名)、極東州立工科大学(単科大学ではない)があります。Academyは特定分野の単科大学で、森林や商業などを扱い、大学院教育も行います。ハバロフスクには経済と法律のAcademyがあり、8000余名の学生を教育しています。Instituteも単科大学ですが職業に直結した4年あるいは5年間の教育を行います。ウラジオス

トックにある極東商科大学は7学部からなり4500名をこえる学生がいます。

ロシアの高等教育における最近の問題はお金の獲得です。大学の収入源は、中央及び州政府(約3割)、授業料(約3割)、政府以外からの研究費や寄付(約4割)からなっています。自由経済への政治体制が安定していなかった90年代はじめは、不当な経費配分や遅配が大きな問題でしたが、最近では州政府の管理が良くなったことと自由市場の自己規制により、比較的安定してきました。しかしながら、全体的な経費節減による収入の減少は各国の状況と同様です。そこで、ロシアの大学は授業料を課さない優秀な学生とともに授業料を自己負担する学生も引き受けるようになってきました。さらに、予算の減少は教育のあらゆる側面に悪い影響を及ぼしつつあります。また、政治的な背景により教官の多くは20歳代、40歳代で、これ以外の世代が少ないという問題があります。

生涯学習

LIFELONG LEARNING

北海道大学放送講座好評裡に終了

平成11年度の北海道大学放送講座が、北海道放送テレビジョン(HBC)との協力で11月7日(日)から始まり、12月12日に好評裡に終了しました。この放送講座は平成10年度までは放送開発センター(現メディア開発センター)からの委託で、北海道教育大学等と共同で行ってきた事業です。この事業の終了に伴い、本学ではメディア教材の開発、大学教育の改善、大学研究資源の地域への公開、地域社会の生涯学習への貢献などを新たな目的として、教育改善推進経費(総長裁量経費)に基づいて、平成11年

および12年に、これまで共同で放送講座を開発してきたHBC放送をパートナーとして、30分12回のシリーズを、2年に分けてテレビ放送講座として放映するものです。

「水の惑星とわたしたち 地球環境にどんな異変が起きているか」(主任講師：地球環境科学研究科教授 市川和彦氏)というテーマで始まった放送講座は、第1回の講座では丹保総長が市川主任講師との対話という形で出演され、「地球環境の時代」といわれる21世紀に向けての科学の在り方について語ら

れました。

放送講座は毎年20万人近い道民が、北海道大学で研究されている高いレベルの科学を、自分の家の茶の間でわかりやすく視聴していることがその特色ですが、それとはべつにテレビの視聴だけでなく、スクーリングを実施し、直接講師から話を聞いたり質問を行うことができます。本年も520人の受講生が受講登録をしました。札幌市のスクーリングでは144人の受講生が参加するなど、旭川・函館・留萌・帯広・

北見の各会場で過去を上回る参加者と活発な質疑が行われました。

現在、来年に向けての取材撮影活動が行われていますが、それと並行してメディア教材としての活用の在り方、全学教育および専門教育等への活用、テキストの出版等が検討されています。

詳しいことは高等教育機能開発総合センター生涯学習計画研究部までお問い合わせ下さい。

センター日誌

CENTER EVENTS, Oct. - Nov.

10月

- 5日 ・ (会議) センター長連絡会
- ・ (会議) 第4回教務委員会共通授業検討専門委員会
- 6日 ・ (会議) 第4回教務委員会修学指導体制検討専門委員会
- ・ (会議) 第8回教務委員会幹事会
- 7日 ・ (会議) 教務委員会教職課程専門委員会
- ・ (会議) センター長連絡会
- ・ (会議) センターN棟改修に伴う関係教官説明会
- 8日 ・ (会議) 第45回センター教官会議
- ・ (会議) 第3回センター予算・施設小委員会
- 13日 ・ (会議) 第6回教務委員会
- 14日 ・ (会議) センターN棟改修に伴う科目責任者会議
- 15日 ・ (会議) 第48回全学教育委員会小委員会
- ・ (会議) センターN棟改修に伴う関係教官説明会
- 18日 ・ (会議) 第3回教務委員会リメディアル教育検討専門委員会
- 19日 ・ (会議) 第19回センター予算・施設委員会
- ・ (会議) 第5回教務委員会修学指導体制検討専門委員会
- 20日 ・ (会議) 第9回教務委員会幹事会
- 21日 ・ (会議) 第49回全学教育委員会小委員会
- ・ (研究会) 職業人大学院に関する研究会(生涯学習計画研究部)
- 25日 ・ (会議) 第46回センター教官会議
- 27日 ・ (会議) 第2回教務委員会教育システム弾力化検討専門委員会
- 29日 ・ (会議) 第50回全学教育委員会小委員会

11月

- 4日 ・ (会議) 第51回全学教育委員会小委員会
- ・ (会議) 第6回教務委員会修学指導体制検討専門委員会
- 5日 ・ (研究会) 大学評価セミナー(高等教育開発研究部)
- 8日 ・ (会議) 第5回教務委員会共通授業検討専門委員会
- 9日 ・ (会議) センター長連絡会
- 10日 ・ (会議) 第52回全学教育委員会小委員会
- 15日 ・ (会議) 第7回教務委員会修学指導体制検討専門委員会
- 17日 ・ (会議) 第10回教務委員会幹事会
- ・ (会議) 第6回教務委員会共通授業検討専門委員会
- 18日 ・ (会議) 第53回全学教育委員会小委員会
- ・ (会議) 第4回教務委員会教務情報システム専門委員会
- ・ (会議) 第20回センター予算・施設小委員会
- 19日 ・ (行事) 北海道大学シンポジウム(於: 学術交流会館)
- 22日 ・ (会議) センターN棟改修に伴う関係教官打合せ
- ・ (会議) 第54回全学教育委員会小委員会
- 25日 ・ (会議) 第47回センター教官会議
- ・ (会議) 第4回教務委員会リメディアル教育検討専門委員会
- ・ (会議) 第28回全学教育委員会
- 26日~27日
- ・ (行事) FD研修会(於: 定山溪)
- 29日 ・ (会議) 第8回教務委員会修学指導体制検討専門委員会
- 30日 ・ (会議) センター長連絡会
- ・ (行事) 第1回北海道大学放送講座札幌スクーリング(於: 学術交流会館)

行事予定 SCHEDULE, Dec. - Mar.

	【日(曜日)】	【行事】	【備考】
12月	24(金) ~ 1月7(金)	冬季休業日	
1月	11(火) ~ 14(金)	補講日	
	15(土) ~ 16(日)	大学入試センター試験	
	17(月)	授業再開	
2月	4(金)	第2学期授業終了	
	7(月) ~ 18(金)	定期試験	
	22(火) 正午	定期試験成績提出締切	
	21(月) ~ 23(水)	追試験	
	25(金)	北海道大学2次試験(前期日程)	
	28(月) 正午	追試験成績提出締切	
3月	12(日)	北海道大学2次試験(後期日程)	
	中旬 ~ 下旬	学科等分属手続	当該学部

「高等教育ジャーナル」原稿募集

高等教育開発総合センターでは、毎年2回「高等教育ジャーナル」を発行しています。本誌は、広く高等教育に関する論議を高め、知識・情報を共有するための発表の場として、これまでに6号まで出版

されております。投稿資格は特に問いません。投稿規定は「高等教育ジャーナル」の巻末か、高等教育開発研究部のホームページをご参照下さい。原稿の締切は1月15日です。

編集後記

あわただしく変化する大学の状況を見ていると、ある賢人のことばを思い出します。「卵のよし悪しを批評するのは存外難しい。最悪の批評家は卵を生むなという。次のレベルの批評家は良い卵とは何かを知っている。さらに良い批評家は良い卵の産み方を教えてくれる。最も優秀な批評家は良い卵を生んでみせる。とかく批評することになれば、自分が鶏であることを忘れてしまう。」北大に優秀な批評家が生まれることを期待します。(オ)

センターニュース 第27号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)

発行日：1999年12月24日

発行元：北海道大学高等教育機能開発総合センター
〒060 札幌市北区北17条西8丁目

電話 (011)716-2111 ・ FAX (011)706-7854

編集委員：小笠原正明・西森敏之・細川敏幸・町井輝久・山口佳三

ご意見、お問い合わせは 印の編集委員まで
電話: (011)706-2194; FAX (011)706-4922

インターネット ホームページ : <http://infosys.academic.hokudai.ac.jp/center>